

琉球に伝わった能の流儀

The School of Nō Brought into Ryukyu

新城 亘 SHINJOU Wataru

(沖縄県立芸術大学大学院

Okinawa Prefectural University of Arts)

琉球王府は17世紀から18世紀にかけて、文学や美術工芸そして芸能と未曾有の文化的発展を遂げた。音楽では湛水親方、照喜名聞覚が古典音楽の基礎を築き、屋嘉比朝寄(1716~1775)が楽譜工四を編纂した。踊りや演劇は冊封使歓待の際の冠船踊りとして発展し、玉城朝薫(1684~1734)は組踊を創始した。

17・18世紀の琉球芸能は能の影響を強く受けたと指摘する研究者は多い。この指摘は次のような文献資料が元になっていると考えられる。

一つは、向象賢(羽地朝秀)の摂政期(1666~1673)の布令で『羽地仕置』である。この中に、官吏任用の心得のひとつとして「謡」を奨励している項目がある。名門の子弟といえど一芸のないものは採用しないとしているが、これは、謡を身につけるきっかけになった。

二つ目は玉城朝薫の家譜で『向姓家譜』である。家譜には、島津吉貴が藩主に即位したことを祝福するため薩摩に遣わされており、朝薫は吉貴の前で仕舞『軒端梅』を舞っている。

三つ目は屋嘉比朝寄ら琉球芸能家の略歴を記した『銘々略傳』である。屋嘉比朝寄は若い頃から薩摩に上り謡曲、仕舞を稽古していたが、目が不自由になったのでやむなく琉球の歌三線を学んだ、という記事である。この三つの史料は、当時の琉球芸能家たちが謡や仕舞を専門的に学んでいたという記録である。

だが、能の流儀は何か、だれが伝えたのかはよく明らかにされていない。

能の流儀は、観世・宝生・金春・金剛・喜多流の五流あるが、今までの有力な説は宝生流である。これは『甲子夜話』に“流は宝生流なり”と梅塢なる者の談を伝えていること、江戸の芝薩摩屋敷で宝生太夫の能を見たこと、島津重豪が宝生太夫から能を学んでいることなどが根拠となっている。だが、八重山地方には宝生流・観世流の謡本が残されていることから、宝生流以外にあるいは観世流ではないかという説もある。

林和利「薩摩藩世襲能役者<中西>の研究」(『歌舞伎の狂言』鳥越文蔵編、以下『中西の研究』と呼ぶ)を参照したところ、琉球に能を指導した人物の存在が浮かび上がってきた。中西家は、江戸時代、薩摩藩島津家に召し抱えられていた有力な「金春流」系世襲能役者で、藩政時代の初めから終りに至るまで、常に中心的存在であったという。

琉球王府に大和横目という役職をもった阿嘉直識(1721~1784)という人物がいるが、彼が残した「阿嘉親雲上直識遺言書」に“中西長兵衛”なる人物が登場する。これは『中西の研究』にも同姓同名の“中西長兵衛”が登場している。また、中西家の初代は“小幡弥兵衛”というが、八重山地方の謡本の中に「小幡家」に関する書き付けがあり、この二

つの関係を考察した。

その結果、薩摩の中西長兵衛と琉球側の中西長兵衛とは同一人物とみられ、また「小幡家」と中西家は同門同志で、17世紀後半から18世紀中葉にかけての琉球に伝わった能の流儀は金春系であったと推定する。